

## 論 文

# 長岡高専における国際交流推進活動 — 五感で伸ばす国際性と英語力 —

田中 真由美<sup>1</sup>・青柳 成俊<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

<sup>2</sup> 機械工学科 (Department of Mechanical Engineering, Nagaoka National College of Technology)

## International Exchange Programs at Nagaoka National College of Technology - Promoting International Understanding and English Skills -

Mayumi TANAKA<sup>1</sup>, Naritoshi AOYAGI<sup>2</sup>

### Abstract

The international exchange project supported by the Institute of National College of Technology was conducted during the academic years 2009 and 2010. The overall aim of this project was to help students develop their skills, knowledge and abilities required for future engineers, through exchanges with higher educational institutions in Asian countries, and by building and tightening regional partnership. The three main programs to achieve this goal were conducting collaborative educational programs with Asian educational institutions and companies, developing overseas training programs, and providing a wide variety of English language learning aids. Although a number of activities and programs were carried out, this paper mainly reports on and discusses those that aimed to promote students' international understanding and English skills. The overall evaluation of those undertakings and suggestions for the development of international exchange programs at national colleges of technology are also provided at the end of this paper.

**Key Words :** *international exchange, inter-cultural understanding, English language teaching*

### 1. はじめに

特別教育研究経費（国際性の向上）が平成 21 年度から 2 年の期間で採択され、「アジア高等教育機関との交流および地域連携による人材育成」をテーマとしたプロジェクトの実施に至った。本プロジェクトは、長岡高専国際交流推進センターを中心に、国際交流に関する学内外組織の連携体制を構築して、「国際異文化理解活動を取り入れた高専教育」によ

り、統合的な人材育成活動を行うことを主眼として行われた<sup>1)2)</sup>。プロジェクトの柱となる取り組みは、アジア高等教育機関との国際共同教育事業、学生海外派遣研修、地域連携による国際交流活動、語学学習支援である。この中でも、特に英語学習支援は、英語科教員との連携を強化して実績を積み重ねてきた。具体的には、海外派遣時のプレゼン教育や英語多読・多聴教育、エッセーコンテスト開催等であり、学生の国際性理解と英語力の向上を「五感で学ぶ体

験的教育」として試みている。本校の国際交流に関する基本的なスタンスは、「新しい体験的環境を提供して、コミュニケーション力と行動力を育成し、そのプロセスの中で自主的に課題を発見する、複眼的な発想力を養う」ことにある。次章で述べる語学学習支援や国際理解活動を始め、アジア探訪と交流なども、この視点からの育成指導であり、国際交流活動室「地球ラボ」ならびに多文化共生と技術社会を融合的に学ぶ「国際関係学演習」は、発見した課題を議論する場となっている。また、本校は『すぐれたコミュニケーション能力と国際的視野をもち、多様な価値観を理解できる技術者の育成』を教育目標の一つに掲げており、持続可能な協力体制のもとに、この理念を達成するためのプログラムを学生に提供するという側面もある。学生海外派遣研修や語学学習プログラム（プレゼン教育やエッセーコンテスト等）、国際関係学演習等への参加が、多様な価値観に触れる端緒となり、共有理解へと発展していくと思われる。また、語学については、海外研修や各種コンテスト等の実践を積み重ねるほど、コミュニケーション能力やプレゼンテーションスキルに対する向上心は大きくなると思われる。工学教育と異文化コミュニケーションに関する語学教育プログラムの同時提供が、学生にとって、新しく柔軟な発想力を生む力になると考えられる。本論文では、「アジア高等教育機関との交流および地域連携による人材育成」プロジェクトにおける語学学習支援と国際理解活動の取り組みの報告と考察を行う。

## 2. 語学学習支援

### 2. 1 多読・多聴活動

一般教育科の英語の授業では、学生のリーディング力を伸ばすために、多読・多聴活動を取り入れている。平成 21 年度と 22 年度は、主に 1~3 学年を中心に活動を行った<sup>3)</sup>。本校では、①辞書を引かない、②わからない部分は読み飛ばす、③好きな本を読み、つまらなくなったら他の本を読む、という 3 原則を取り入れ、学生が授業内、あるいは、授業外で宿題として、英語を読む活動を取り入れている。図書によっては CD が付属しているため、英語を聞きながら読む多聴活動を行うことも可能となっている。

現在、本校図書館には約 6,720 冊の多読用図書があり、英語学習者向けのレベル別読み物、自然科学を中心とした子ども向けの学習用教材、絵本、マン

ガなど、内容や難易度も様々である。図書には、総語数や読みやすさのレベルを示したシールが貼られているため、それを頼りに、学生は自分の英語力にあったレベルの本を容易に選ぶことができる。学生は 1 冊読み終わる毎に読んだ本のタイトルや語数、感想等を記録帳に記録する。その際、これまで読んだ本の語数を足して累積語数も記入する。これにより、読んだ本の総語数が増えたり、読む本のレベルが上がってゆくことに喜びや達成感を感じ、学生の読む意欲がさらに高まることが期待できる。

また多読・多聴活動の一環として、読んだ内容についての情報交換を英語で行ったり、イラスト付きのブックレビューを書いて本校図書館が発行する『図書館だより』に掲載したりと、他の学生と読んだ本の魅力を共有する活動も行っている。そのような活動を通して、学生の読む意欲の向上に努めている。

多読・多聴活動は学生のリーディング力向上を第一の目的として行っているため、その目的がどの程度まで達成できたかを、アンケートと英語試験の結果から検討する。

表-1 は、平成 21 年度から 2 年間、英語多読に取り組んだ学生を対象に行ったアンケートの結果である（対象者：2 年生 194 名）。半数の学生が多読をして英語のリーディング力が伸びたと感じていることがわかった。

表-1 多読で英語のリーディング力が伸びた (%)

そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそうは思わない	そうは思わない
11	39	35	9	6

アンケートに回答した学生たちのリーディング力が実際に伸びたかどうかを確認するために、平成 22 年度（2 年次）の 5 月と平成 23 年（3 年次）の 5 月の TOEIC Bridge IP を共に受験した学生（187 名）のリーディングセクションの平均点を比較したところ、56.8 点から 60.8 点に伸びていることがわかった。（ただし、英検 2 級以上を取得している学生は TOEIC IP を受験したため、データには含まれない。）本校の英語科の授業では、多読以外の英語学習も行っているため、今回の平均点の伸びを多読だけの効果と判断することはできないが、アンケート結果と合わせて考えると、多読がリーディング力向上に何らかの影響を与えていると考えられる。

## 2. 2 英語エッセーコンテスト

英語エッセーコンテストは、学生の発信するための英語力を伸ばすために、国際交流推進センターが開催組織、センターの下部組織である地球ラボ運営委員会が運営組織となって行われた。エッセー・ライティングの個別指導とエッセーの評価基準作成は英語科教員が行い、審査はセンターに所属する専門学科の教員が行った。委員会が開催・運営組織になったことで、委員の交代や人事異動があっても継続開催が可能なコンテストとなった。また、英語教育に関して、英語科と専門学科との連携も可能となり、学校を挙げて英語教育に取り組む体制を構築することができた。

エッセーコンテストの応募資格は研究生を除く本校の全学生にある。本コンテストは全国英語教育研究団体連合会（全英連）の全国高等学校英作文コンテストの予選を兼ねており、1～3年生の上位入賞作品は全英連のコンテストに応募するため、応募者は全英連が毎年提示する応募規定（テーマと制限語数）でエッセーを書く。平成21年度は1年生が My Favorite Thing(s)、2年生以上が What I Can Do for Our Planet, Earth をテーマに、10名がエッセーを書いた。

平成21年度のコンテストは開催初年度ということもあり、コンテストの運営やエッセー・ライティングの指導方法などを改善するため、コンテストに携わった学生（10名）と審査教員（6名）に記述式のアンケート調査を行った<sup>4)</sup>。エッセーコンテスト参加に関する感想を聞いたところ、5名が、「自分の英語力を試し、弱点を発見できた」、4名が「今後どのような英語学習をすればよいかわかった」と回答した。一方、提出期限に間に合うように指導教員にスケジュールを示して欲しいとの要望もあった。また、エッセーの審査を担当した教員には、審査をして難しかった点と改善策の案について質問したところ、観点別のエッセー評価は英語を専門としない教員には難しいこと、コンテストへの参加人数が10名と少なかったことが指摘されたが、コンテストの運営についての問題は挙げられなかった。

平成22年度は、1年生が My Eco-Life、2年生以上が A Letter to Myself in the Future をテーマに、13名が応募した。平成22年度のコンテストでは、エッセーの審査方法の説明を英語科教員がより丁寧に行った。また、コンテストの参加人数を増やすための工夫として、ライティングの授業を受けている2年生全員に授業内でエッセーを書かせ、良く書けている学生に積極的にコンテストに参加するよう促し、

指導した。その結果、参加人数は13人となり、前年度よりも参加者が増える結果となった。

## 2. 3 英語スピーチコンテスト

学生の発信するための英語力を伸ばすため、本校では、13年前から英語スピーチコンテストを行っている。本コンテストは、関東信越地区高専英語弁論大会出場への予選も兼ねており、弁論部門と暗唱部門の2部門で審査が行われる。本特別教育研究経費プロジェクトとしては、参加者への指導を強化し、これまで以上に学生の英語力の伸長に努めることを目標とした。

本コンテストでは、スピーチ指導は英語科の専任と非常勤の教員が、運営は学生課の事務職員と英語科がそれぞれ協力して行っている。当日は校長が大会の挨拶を行い、進行は学生が行う。審査と全体的な講評は外部の英語教育関係者が行い、大会終了後は、審査員から出場者へ個別の講評も行われる。

平成21年度以前も、本校の学生は高専主催の関東信越地区大会での入賞や全国大会出場などを経験してきた。関東信越地区大会では、平成19年度に暗唱部門で2位、平成20年度に暗唱部門で2位、スピーチ部門では1位を獲得して全国大会に出場したが、特別教育研究経費プロジェクトの2年間、個別指導に更に時間をかけるなど、英語の指導を強化した結果、平成21年度は関東信越高専英語弁論大会の暗唱部門で本校の学生2名が、それぞれ3位と特別賞を受賞し、スピーチ部門では1位を獲得して全国大会へ出場した。平成22年度は関東信越地区大会で上位に入賞した本校の学生が全国大会で第2位を獲得し、本校初の全国レベルの英語スピーチコンテストでの入賞を果たした。学生の入賞のみでコンテストの取り組みが評価されるわけではないが、教員による学生へのコンテスト参加の声かけと継続的な指導が結果となって表れていると考えられる。

## 3. 国際理解活動

### 3. 1 国際関係学演習

本校の選択科目である国際関係学演習は全学生を対象に開講されており、受講者同士が互いの文化や違いを理解し合い、良好な関係を築くためのコミュニケーションスキルを向上させるための講座である。講師は新潟県長岡市国際交流センター長が務めている。本講座は学科の垣根を越えたものであるため、他学科との学生や留学生との交流が行われる。

講座は演習形式で行われ、受講者の出身国の事情や文化比較を学んだ後、日本文化の特性を異文化の視点で学びながら、異なる者同士が理解し合い、その結果、意見を引き出す（ファシリテーション）技術と意見を伝える（プレゼンテーション）技術を身につけ、それらを統合したコミュニケーションスキルを向上させている。

本演習科目では、コースワークの一部として、新潟県国際交流協会及び新潟県国際理解教育推進協議会主催の「国際理解教育プレゼンテーションコンテスト」に出場している。平成 21 年度は、本校から 2 チームが出場し、それぞれ、「お互いを“知る”ということ」、「『協働』しよう」というタイトルでプレゼンテーションを行った。平成 22 年度は、「feel my feeling」というタイトルで、コミュニケーションをとるためのポイントについて発表し、特別賞を受賞した。

### 3. 2 国際理解ワークショップ

平成 22 年度に、新潟県国際交流協会主催の国際理解ワークショップを電子制御工学科 2 年生対象に行った。「日本で学ぶ異文化理解～多様な隣人と共に生きる～」をテーマに、新潟県立大学の学生 8 名がインストラクターを務めた。クイズやグループワーク、インストラクターによるプレゼンテーションを通して、新潟県在住の外国人の生活や、外国人との接し方などを学んだ。本ワークショップの開催は、県の事業を介しての、文化系大学－高専連携の初めての試みである。

表-2 は 43 名のワークショップ受講者を対象に行ったアンケート結果である。7 割の学生が今回のようなワークショップをまた受けたいと回答している。「受けたい」と回答した学生は、「来てくれた学生がとても気さくでよかった。」、「とても楽しかった。もう少し長い時間でワークショップをやりたいかった。」、「外国人について考えたりすることができてよかった。」、「これから外国人と交流する機会があると思うから、今日学んだことを活かしていきたい。」などと、アンケートの中で感想を述べている。今回のワークショップは特別活動の時間を利用して行ったため、本来 90 分程度で行う内容を 50 分に短縮して行ってもらった。そのため、アンケートで時間の短さに関する指摘があったが、全体としては、ワークショップを受講する機会を与えられたことを肯定的に捉えている学生が多かったため、今後もこのような機会を提供して行きたい。

表-2 またワークショップを受けたいですか (%)

受けたい	どちらでもよい	受けたくない
70	30	0

### 3. 3 異文化コミュニケーション講演会

平成 22 年度に、異文化コミュニケーション講演会を 2 年生対象（約 200 名）に行った。講師として、イングランドのウォーリック大学（The University of Warwick）、応用言語学センター（The Centre of Applied Linguistics）のリチャード・スミス博士（Dr Richard Smith）が、外国人に対する固定観念と偏見と、それらを回避するための考え方や表現方法などに関する講演を行った。講演のほとんどが英語で行われ、英語科教員が適宜、通訳を務めた。

本校の学生だけでなく、教職員の異文化理解に関する意識を高めるために、教職員向けの講演会もスミス博士によって行われた。「Critical Issues for 21st Century ELT: What English? Whose Method? Which Culture?」を演題に、英語教育における異文化理解指導のあり方についての講演が行われた。本講演会は、地域貢献活動の一環として、外部の人々も参加可能としたところ、新潟県内の大学、高校、中学校、英会話スクールなどの英語教育従事者や英語教育専攻の大学院生が訪れた。

以下は、学生向けに行われた講演会を聴講した本校 2 年生のうち、アンケートに協力してくれた学生の感想である。

- ・わかっていたつもりなことでも、異文化理解の重要性について改めて考えさせられた。
- ・海外のことを海外から来た方から聞いて、より理解できた。
- ・理解が少し難しかったけど、英語力をつけるには大変よかった。
- ・ほとんど全部英語だったが、話しもある程度は理解できたし、内容も面白かった。
- ・本場の英語を聞いてよかった。
- ・英語での話しだったのであまり理解はできなかったが、よい経験になった。
- ・他の文化を理解する際に、偏った固定観念があるといけないということなどが分かった。
- ・英語だったから、資料がもう少し分かりやすいといいかなと感じた。いい経験になったと思う。
- ・異文化理解についてだけでなく、英語で話を聞けるというのもいい機会だと思う。
- ・外国人から、日本はどのようなものであるのかを

実際に聞けたのでよかった。

- ・最初から最後まで英語の授業はこれが初めてだったが、たまにはこういう授業があってもいいと思った。
- ・本場の英語が聞けてよかった。あまり理解できなかったけど。
- ・英語の話を聞いて勉強になった。

上記の感想から、異文化理解についての学習だけでなく、英語学習の機会として、講演会がよい経験となったことがわかる。今後このような講演会を行う際は、学生が内容をより理解できるような工夫をして行きたい。

### 3. 4 オーストラリア研修

海外研修は平成 17 年度から始まった研修制度であり、学生の国際的な視野を養うことを目的に、これまで、シンガポール、中国、マレーシア、ベトナムに学生を派遣してきた<sup>5)</sup>。研修の内容は、訪問国の工業事業や文化の直接体験であり、語学研修の色合いはなかった。しかし、平成 21 年度と 22 年度は、学生の英語力を伸ばすことを目的に、オーストラリア研修も実施することとなった。

研修の内容は、オーストラリアの中高一貫の中等教育機関への訪問とホームステイ、そして文化探訪である。平成 21 年度は 3 月 21 日～3 月 27 日までの 7 日間研修が行われ、10 名（男子 7 名、女子 3 名）の学生が参加した。訪問した都市は、ゴールドコースト、ブリスベン、シドニーで、現地校訪問とホームステイはブリスベンで行われた。訪問した現地校の Marsden State High School では、本校の研修参加者が日本や長岡に関するプレゼンテーションを英語で行った他、社会や体育などの授業に参加することもできた。図-1 は、現地校の学生と研修に参加した学生たちの交流の様子である。ホームステイでは、学生が 2 人一組、あるいは単独でホストファミリーの家に 3 泊した。平成 21 年度の研修に参加した学生たちは、研修の結果、研修前よりも一定時間で産出できる英語の発話量が大きく増加し、話す力の向上といった研修の成果が見られた<sup>6)</sup>。しかし、全体的な研修期間とホームステイ期間が少し短かったことが国際交流推進センター会議の中で指摘されたため、平成 22 年度の研修は 8 月 17 日～8 月 24 日の 8 日間、うち、ホームステイを 5 日間とした。研修には 6 名（男子 3 名、女子 3 名）が参加した。文化探訪はゴールドコーストとブリスベンの両都市で、現地校訪問とホームステイはゴールドコーストで行

われた。今回訪問した Keebra Park State High School では、前年度同様、学生によるプレゼンテーションと授業参加が行われた。



図-1 現地校の学生との交流の様子

平成 22 年度の研修旅行の後で参加した学生 6 名にアンケート調査を行ったところ、表-3 から表-5 のような結果となった。表-3 からわかるように、2 名の学生は費用を高いと感じていたが、プログラムは充実していたと全員が回答しているため（表-4）、本研修が参加者にとって有意義なものであったことが伺える。表-5 にあるように、今後も本研修を継続して行くことが望ましいが、学生の研修費用の負担が少しでも軽くなるよう、オーストラリア以外の地域も考慮に入れながら、語学研修プログラムの内容を発展させて行きたい。

表-3 訪問地とプログラムの内容から費用は適当ですか

安い	適当	高い	その他
2	2	2	0

表-4 体験プログラムは充実していましたか

大変充実していた	充実していた	ふつう	やや不満足	その他
5	1	0	0	0

表-5 訪問地への本プログラムを続けた方がよいですか

是非続けたい	続けてもよい	その他
5	1	0

## 4. 考察

本プロジェクトにおける英語学習と国際理解に関する取り組みについて、アンケート結果と表彰等の実績によってそれぞれ評価してきた。どの取り組みにも今後の改善点はあるものの、それぞれが成果を挙げたと考えられる。語学学習支援として行った多

読・多聴, エッセーコンテスト, スピーチコンテストは, 英語の文字を目で認識して読んだり書いたりするだけでなく, 英語の音声を目にして行う活動であり, また, 国際理解活動は, 人の話を見聞きする他, ワークショップや演習形式の講座で学生自身が体を動かして理解を深めるものであった。海外研修は, 視覚や聴覚の他, 味覚, 嗅覚, 触覚を最大限に活用して英語学習や異文化理解を体験するものであったが, 現地の人々とコミュニケーションを英語で行うことが難しい中, ひょっとしたら, 言葉だけでなく, その場の状況などから相手の気持ちを直感的に感じとる第六感をも働かせるような機会になったかもしれない。

以上のように, 個々の取り組みは成果を挙げることができたが, 取り組み全体として今後改善すべき点もある。一点目は, 「技術者育成」に焦点を当てた英語学習プログラムが行われなかったことである。本論文で取り上げた取り組みはいずれも, 本校の教育目標の一つ『すぐれたコミュニケーション能力と国際的視野をもち, 多様な価値観を理解できる技術者の育成』に沿って行われ, また本プロジェクトには「ものづくり」に関する取り組みも数多くあったが, 技術育成の要素をより全面に押し出した語学学習支援活動は行われなかった。専門教育を長期に渡って受けた 4, 5 年生などを対象に, 技術者として必要な, より実践的な英語によるコミュニケーション能力を育成する活動を取り入れることが今後必要となるだろう。

今回の取り組みにもう一点欠けていたことは, 他高専や技大との交流である。本プロジェクトの最終報告会で, 外部評価委員の太田伸子教授(石川工業高等専門学校)から, 他高専との成果の共有が取り組みの発展につながることを, そして同じく評価委員の伊藤義郎教授(長岡技術科学大学)からは, 他高専や技大との協力が取り組みの持続性につながることを指摘された。今回の取り組みに欠けていた他高専や技大との情報交換や取り組みの共有などを行いつつ, 国際交流推進活動の活性化に取り組むことが今後必要である。

## 5. おわりに

本論文では, 高専機構の特別教育研究経費プロジェクト「アジア高等教育機関との交流および地域連

携による人材育成」における, 語学学習支援, 国際理解活動, そして学生海外派遣研修を取り上げ, それぞれの取り組みを個別に評価し, 取り組み全体については, 今後の改善点を検討した。その結果, 本校では, 個々の取り組みを改善させるだけでなく, より「技術者育成」の観点に立った語学学習支援や国際理解活動の実施, 高専間や技大との連携を今後検討すべきであることがわかった。とりわけ, 高専間や技大との連携は, 本校だけでなく, 今後, 高専における国際交流推進活動を発展させる上でも必要な視点と考えられる。他の高校や大学との差別化を図るためにも, それぞれの高専の特色を活かした取り組みに加え, いくつかの, あるいは全高専を対象にした協同国際交流事業の発展が重要となるだろう。

**謝辞:** 本論文の活動は, 国際交流推進センター, 地球ラボ, 英語科, 学内外の皆様との協力により行われました。ご協力いただいた皆様に謝意を表します。

## 参考文献

- 1) 長岡工業高等専門学校:平成 21 年度「中間報告書」, 高専機構特別教育研究経費(国際性の向上)プロジェクト, 長岡工業高等専門学校国際交流推進センター, 2010. 5
- 2) 長岡工業高等専門学校:平成 22 年度「最終報告書」, 高専機構特別教育研究経費(国際性の向上)プロジェクト, 長岡工業高等専門学校国際交流推進センター, 2011. 3
- 3) 田中真由美, 大湊佳宏, 土田泰子:長岡高専における英語多読実践プロジェクト(その 1), 長岡工業高等専門学校研究紀要, Vol. 45, pp.19-24. 2009
- 4) 田中真由美, 土田泰子, 占部昌蔵, 大湊佳宏:学科間連携による校内英語エッセーコンテストの実践—初年度の試み—, 平成 22 年度高専教育講演論文集, pp.71-74, 2010
- 5) 青柳成俊, 土田泰子, 衛藤俊彦, 山崎誠, 涌田和芳:学生の海外研修と国際交流の推進, 高専教育, Vol. 33, pp. 631-635, 2010
- 6) 大湊佳宏, 占部昌蔵, 田中真由美:海外派遣研修(オーストラリア)に参加した学生の英語スピーチ分析, 長岡工業高等専門学校研究紀要, Vol. 46, pp.1-6. 2010

(2011. 9. 26 受付)